川村学園女子大学研究紀要　第24巻　第1号　176頁―194頁　2013年

実朝と信生法師
――東国の和歌表現――

今関敏子

キーワード・東国　伝統　差異　待つ女　待つ男

要旨

実朝の寵臣であった信生法師（俗名・塩谷朝業）の家集『信生法師集』を中心に、和歌を媒体にした君臣の交流、詠歌傾向の共通性と相違、東国に在る歌人の独自性について考察する。

『信生法師集』にみる実朝像は理想の覇者であり、没後も変わらぬ敬慕の対象であった。作品に神格化された実朝とその臣下たちの、和歌をめぐる具体的な交流の場面は摑み難い。しかし、両者の和歌表現の類似性・共通性に、梅花のエピソードに象徴される親和性と共感が見出せる。

一方、恋歌には全く異なる詠歌傾向が歴然である。伝統的な題詠歌を配列構成した実朝と、逸脱した土俗性を表出した信生には、資質の相違に相俟って、環境、立場の相違も反映されていよう。

このような相違はありながら、東国という辺境にあって、中央で醸成された伝統様式を学ぶ達成と限界を両者にみることが出来る。

1、理想の覇者・実朝

信生法師（一一七一？～一二二七？）――俗名・塩谷朝業は源実朝（一一九二～一二一九）の寵臣であった。同母兄・蓮生（俗名・頼綱）、次男・時朝とともに東国の歌人としても名を残している。出自は藤原道兼の血を引く宇都宮氏。朝業は塩谷を号した。実朝の死後、多くの家臣が出家した。信生はその翌年得度し、兄・蓮生とともに、法然の高弟・証空上人の弟子となった。

信生の歌は、勅撰集に12首、私撰集に46首入集しており、家集に『信生法師集』がある。

この作品は孤本、伝本は江戸初期書写の宮内庁書陵部本のみ。書名『信生法師集』は、霊元天皇筆と伝えられる外題である。前半の1～47番歌までは和歌が二字下げ、後半の48～209番歌は詞書が二字下げの書写形態をとる。

前半部には、僧形の信生が京を出発して東国に赴く道程が記される。散文（詞書）と和歌を連ねて時間が進行していく形式は紀行にジャンル分けし得る。『信生法師日記』という別名のある所以であろう。

後半部は和歌が主体の歌集の体裁をとる。部立はないが、詠歌内容から、春・夏・秋・冬・賀・恋・雑に分類出来る。春～賀は題詠が多いのが特徴的であるが、恋と雑では、詞書が長くなる傾向がある。雑には、妻に先立たれた身で、幼い子どもたちを残して出家する辛さが叙述されている。

紀行部にはとりわけ実朝追慕が色濃い。鎌倉では、亡き実朝が一入偲ばれ、主君の死は次のように語られている。[1]

薪尽きにし暁の空、形見の煙だに行方も知らず、霞める空はただただしきを、笹分けし暁にあらねども、帰さは、袖の露も数まさりし折なんど、ただ昨日今日と移り行く夢を数ふれば、早七年になりにければ、おどろかるるは悲しとも愚かなり。すべて消滅のことわり、惜しむべきならず、悲しむべきならねど、釈尊入滅の如月十五夜の空、鶴林の権利にかきくれにしは、六道覚悟の聖者より始めて、憂へざる者なく、「我師入滅、我即入滅」と悲しび、心なき草木のよすがまで、憂への色を含みき。いはんや、濁世末代の愚かなる凡夫、いかでか涙の色袖に出でず、悲しびの声外に聞こえざらん。昔に変らぬ有明の空の気色はつれなく覚えて

22眺め侘び煙となりし面影も霞める月も明け方の空

七年を経た今も、悲しみは消えない。釈尊入滅に重ねられる不在の重さの中に信生は在る。

続けて、敬慕する主君の人となりに触れる。この部分は、忠臣として生前の実朝を語った紀行部唯一の箇所と言える。

抑、かたじけなく天枝帝葉の塵より出でて、兵馬甲の道を伝へ給ふ事は、思ふに、生まれて世々になりぬる中に、広く唐土の文を習ひ、その道を見給へかし。有難かるべきぞかし。彼の張良は兵法の文を習ひて、謀を帷帳のうちにめぐらしき。まことに、漢才をもて、和才を和らぐる理をも知り給へるなるべし。中にも大和言の葉は、みちさりとその興りき。君となり、臣となる契り、世々に深しと言ひながら、殊に忘れがたきは、花・時鳥・月・雪の折々の御情なり。あまねき交り、冬の雪よりも積もりにしものをや。

23言の葉の情をしのぶ露までもいづれの草の陰に見るらむ

まず、信生にとっての主君・実朝は、皇統の血を引く武人、和魂漢才の治者であった。そればかりではない、みやびの世界の住人でもあった。中でも大和言の葉―和歌は、君臣の絆を強める役割を果たした。これは、歌人としての実朝の自己認識が、将軍ではなく鎌倉に在る後鳥羽院廷臣であったこと[2]に重なろう。

引用部傍線部は『古今集仮名序』[3]の次の部分を想起させる。

いにしへの世々の帝、春の花の朝、秋の月の夜毎に、さぶらふ人々を召して、事につけつつ、歌をたてまつらしめ給ふ。あるは花をそふとて便りなき所に惑ひ、あるは月を思ふとてしるべなき闇にたどれる心ごころを見給ひて、賢し、愚かなりと知ろしめしけむ。

和歌を通して臣下の器量を見抜く帝の政道は、実朝にも通じるものであろうが、信生が寵臣の視点で強調するのは、信頼の深さと温情ある待遇である。紀行部には、共に実朝に仕え、今は姥捨山近くに蟄居している伊賀式部光宗を訪ね、旧交をあたためる叙述があるが、光宗は「君に仕へし昔は、和歌の浦波同じ身に立ち交じり、かく世を遁れぬる今は、朝倉山の雲となりぬる人」と表現されている。和歌を媒介にした臣下同士の結びつきも深い。

和歌を介した政はまさしく、「みやびをもってする王道」であり、信生にとって実朝は理想の覇者であった。

2、和歌をめぐる君臣の交流

Ⅰ君臣の贈答

忠臣・信生の筆による実朝像は神格化に近いとも言える。家集の執筆意図は、理想の覇者の像を不動のものにすることにあったと思われる。[4]それゆえ、実朝在りし日の印象に残る場面や出来事が臨場感豊かに回想されることはない。暗殺という非業の死とその前後の状況に触れられることもない。従って、『信生法師集』から、和歌をめぐる交流の場がいかなるものであったのかを具体的に知ることは出来ないのである。

しかし、例外はある。後半の歌集部には、一首だけ君臣の触れ合いの垣間見られる歌が記載されている。

右大臣殿、梅花を折りて賜ぶとて「君ならで誰にか見せむ」と仰せられて侍りしに

58うれしさも匂ひも袖にあまりけり我がため折れる梅の初花

この歌については『吾妻鏡』建暦二年二月一日[5]の条に次のように記されている。

将軍家以二和田新兵衛尉朝盛一為二御使一。被レ送遣二梅花一枝於塩谷兵衛尉朝業一。此間仰云。不二名謁一。たれにか見せんと許云て。不レ聞二御返事一可二帰参一云々。朝盛不レ

違二御旨一。即走参。朝業追奉二一首和歌一。

実朝は「名乗らず誰にか見せんとだけ言って返事を聞かずに帰って来るように」と申しつけて和田朝盛を使者に立て、朝業（信生）に梅の花を贈った。使者は仰せに従ったのだが、状況を察知した朝業が即刻奉ったのが右の和歌ということになる。

同歌は私撰集『新和歌集⑥』に次のような贈答歌として掲載される。

鎌倉右大臣より梅を折りて賜ふとて

17君ならで誰にか見せむ我が宿の軒端に匂ふ梅の初枝

御返事　　信生法師

18うれしさも匂ひも袖にあまりけり我がため折れる梅の初花

また『玉葉集』には、

鎌倉右大臣梅の枝を折りて誰にか見せむと遣はして侍りける返事に

という詞書で載る。

実朝歌「君ならで誰にか見せむ」は、言うまでもなく「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」（古今・春上38・紀友則）の上の句の踏襲である。下の句「知る人ぞ知る」は自ずと意に含まれ、梅の色香の素晴らしさを共感できる人物として選ばれた光栄を、臣下に感じさせずにはおくまい。息の合った応答である。

実朝が歌会をしばしば催していたこと、こよなく梅を愛したことは『吾妻鏡』や『金槐和歌集』に載る歌の数々から知られる。しかし、梅を媒介にした具体的な臣下との交流が窺われるのは、『信生法師集』の、この一箇所のみ。和歌の役割を語る印象的なエピソードである。

Ⅱ和歌表現の類似性・共通性

残された和歌を手がかりに実朝と信生の間柄を探ってみたい。

定家所伝本『金槐和歌集』と『信生法師集』歌集部には共通する和歌表現が見出せる。実朝歌と信生歌を並べ、同語・同語句に　　を、類似表現、対照表現に傍線を付して比較する。

まず、影響関係を疑い得ない次の例を見よう。

【例1】

［実朝］　夏の暮によめる

154夏はただ今宵ばかりと思(ひ)寝の夢路に涼し秋の初風⑦

［信生］　立秋

75夏はただ今宵ばかりと思ひ寝の覚むればやがて秋の初風

第四句を除き、すべてが一致する。

このような例は他にはないが、語・語句の選択、語法、構

造、詠歌姿勢に共通性、類似性のみられる例は少なくない。以下、列挙する。

【例2】

［実朝］　立春の心をよめる

2九重の雲居に春ぞ立ちぬらし大内山に霞たなびく

［信生］　立春

48梓弓春来にけらし高円の尾上の宮に霞たなびく

「霞たなびく」は珍しい表現ではないが、両歌とも「ほのぼのと春こそ空に来にけらし天の香具山霞たなびく」（新古今・春歌上2・後鳥羽院御集1320）の影響があろう。

【例3】

［実朝］　故郷の春の月といふことをよめる

34誰住みて誰眺むらむ故郷の吉野の宮の春の夜の月

寺辺夕雪

331故郷はうらさびしともなきものを吉野の奥の（雪の夕暮）

［信生］　故郷雪

109誰住みて幾代ふりぬと眺むらむ吉野の宮の雪の夕暮

実朝歌331第五句は欠字である。「冬籠り春に知られぬ花なれや吉野の奥の雪の夕暮」（後鳥羽院御集・正治二年十一月八日影供歌合1510）他、『新古今集』の影響に鑑み、「雪の夕暮」と考え得る。[8] 信生歌もその根拠になろう。

【例4】

［実朝］　人のもとに詠みて遣はし侍し

67春は来れど人もすさめぬ山桜風のたよりに我のみぞ訪ふ

故郷萩

182故郷のもとあらの小萩いたづらに見る人なしみ咲きかぬ散りなむ

［信生］　深山花

64遠近の跡なき峰の桜花見る人なしに春や経るらむ

人知れず咲く花への着目。

【例5】

［実朝］　更衣をよめる

117惜しみこし花の袂も脱ぎかへつ人の心ぞ夏にはありける

［信生］　更衣

70心もや単に変る夏衣立ちても居ても風ぞ待たるる

衣替えで変る人の気分。

【例6】

［実朝］　夏の暮によめる

153禊する川瀬に暮れぬ夏の日の入相の鐘のその声により

［信生］　山寺三月尽

69飽かなくに春の日数も初瀬山春も尽きぬる入相の鐘

季節の終わりを「入相の鐘」に象徴させる用法は意外に少ない。[9]

【例7】

［実朝］　夕秋風といふことを

184秋ならでただおほかたの風の音も夕はことに悲しきものを

夕の心をよめる

185おほかたにもの思（ふ）としもなかりけりただ我がためのの秋の夕暮

［信生］　荻

78おほかたにもの思ふとしもなけれども夕は悲し荻の上風

孤愁の表現にみる同表現の選択。

【例8】

［実朝］　月をよめる

211我ながら覚えず置くか袖の露月にもの思（ふ）夜頃経ぬれば

［信生］　寄鹿恋

119我ながら覚えず濡るる袂かな鹿の音鳴かば的や契し⑩

「我ながら覚えず…」という表現は勅撰集にはない。

【例9】

［実朝］　秋歌

250昔思（ふ）秋の寝覚の床の上をほのかに通ふ峰の松風

［信生］　隠居の後、秋の末つ方、うちしぐれたる夜半に、鹿の鳴き侍りしを

94昔思ふ露もまだ乾ぬ床の上にしぐるる夜半の小牡鹿の声

頻繁に用いられる語句ではない「昔思ふ」「床の上」が一首の中に入る共通性。

【例10】

［実朝］　十月一日よめる

275秋は往ぬ風に木の葉は散りはてて山さびしかる冬は来にけり

［信生］　山里の住まゐ、人目もかき絶えて心細き夕暮に、木の葉の深く散りつもりて侍りしかば

97秋も去ぬ宿は木の葉に埋もれて頼めし人は訪れもせず

「秋」「去ぬ」「木の葉」が同順で詠み込まれる。

【例11】

［実朝］　松風時雨に似たり

276降らぬ夜も降る夜もまがふ時雨かな木の葉の後の峰の松風

277神無月木の葉降りにし山里は時雨にまがふ松の風かな

［信生］　水上落葉

102木の葉散る音は時雨に変はらぬは岩間の水を染むるなりけり

「木の葉」「時雨」を一首の中に用いる。

【例12】

［実朝］　月前嵐

304更けにけり外山の嵐冴え冴えて十市の里に澄める月影

［信生］　時雨

99かきくらし片岡山は時雨るれど十市の里は曇らざりけり

十市の里の澄んだ光景。

【例13】

［実朝］　屏風に三輪の山に雪の降れる所

311冬籠りそれとも見えず三輪の山杉の葉白く雪の降れれば

社頭雪

312み熊野の梛の葉しだり降る雪は神のかけたる垂にぞあるらし

［信生］　社頭雪

105降る雪は三輪の神杉結べども冬のしるしぞ隠れざりける

社頭雪

106降る雪にさす榊葉も埋もれてあらぬ梢に懸くる白木綿

語が重なるだけではなく雪に降りこめられた霊山の詠を二首並べる配列も共通する。

【例14】

［実朝］　松に寄するといふことをよめる

356位山木高くならむ松にのみ八百万代と春風ぞ吹く

月に寄する祝

367万代に見るとも飽かじ長月の有明の月のあらむかぎりは

［信生］　寄月祝

112曇りなく光もやがて有明のつきせぬ御代の影ぞのどけき

寄日祝

113位山高き峰より出づる日の影のどかなる雲の上かな

『信生法師集』中、賀歌はここに挙げた2首のみ。続けて2首並ぶ配列の共通性を考え併せても、語の重なりは偶然ではあるまい。

【例15】

［実朝］　頼めたる人のもとに

419待てとしも頼めぬ山も月は出でぬ言ひしばかりの夕暮の空

［信生］　寄雨恋

134今来むの契もいさや数ならぬ身を知る雨の夕暮の空

心ならず遠き程へ立ち離れ侍りし女の事を思ひ侍りて

142思ひやる心の末ぞ知られける千里の雲の夕暮の空

待ちぼうけに眺める夕暮の空。

【例16】

［実朝］　月に寄せて忍ぶる恋

449春やあらぬ月は見し夜の空ながら馴れし昔の影ぞ恋しき

［信生］　雨の後、月初めて晴れ侍る夜、宿に書きつけ侍る

21月影も春も昔の春ながら元の身ならで濡るる袖かな

秋恋

116いかにせむ月やあらぬの秋の空春だに堪えぬ夜半の眺めを

「月やあらぬ春は昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして（古今・恋歌五747・在原業平／伊勢物語四段）」を下敷きにしている。

【例17】

［実朝］　暁の恋といふことを

456暁の鳴の羽掻き繁けれどなど逢ふことの間遠なるらむ

［信生］　寄鳥恋

129暁の鳴の羽掻き数々に繁くものを思ふ頃かな

「暁の鳴の羽掻き百羽掻き君が来ぬ夜は我ぞ数かく」（古今・恋歌五761・よみ人しらず）を踏まえていることは言うまでもない。

【例18】

［実朝］　海辺立春といふ事をよめる

536塩釜の浦の松風霞むなり八十島かけて春や立つらむ

［信生］　海辺霞

52塩釜の浦さびしくも見ゆるかな八十島霞む春の曙

和歌の構造は重ならないが、両歌とも「塩釜の浦」「八十島かけて」が入る先行歌「塩釜の浦吹く風に霧晴れて八十島かけて澄める月影」（千載・秋歌上285・藤原清輔）の季節を秋から春に変えた趣。

【例19】

［実朝］　海辺春望

543難波潟漕ぎ出づる舟の目も遥に霞に消えて帰る雁金

［信生］　海上帰雁

61海の原空もひとつの浪間より絶えみ絶えずみ帰る雁金

「帰る雁金」を第五句に置き、広大な海の彼方へ消えていく光景を詠む。

【例20】

［実朝］　屏風絵に野の中に松三本生ひたる所を衣被れる女一人通りたる

591おのづから我を尋ぬる人もあらば野中の松よみきと語るな

［信生］　寄松恋

125武隈の松にて年ぞ積もりぬるみきと思はで老いや果てなむ

詠歌内容は異なるが、「武隈の松は二木を都人いかがと問はばみきと答へむ」（後拾遺・雑三1041・橘季通）に通じる「見き」に「三木」をかける手法。

表現の類似性・共通性については、影響関係の結果なのか、偶然の一致なのか、他の要素が介在しているのかという判断

がなかなか困難である。見落しもあろうことを恐れる。さらに慎重な検討が必要であることは言うまでもない。

しかしながら、以上に挙げた例のすべてが全くの偶然とは考えにくい。実朝と信生の間には和歌を媒体に心を通わせる場が確かにあったという手応えを感じさせる。創造をめざす心の方向性と、その回路としての言葉――日常とは次元を異にする世界の共有が君臣の絆を強めたに相違ない。定家所伝本『金槐和歌集』が実朝数え年二十二歳で成立したこと、『信生法師集』歌数が209首のうちの類似例であることを考え併せれば、短い間の豊かな交流が深い信頼関係を育んだことは想像に難くない。先に挙げた梅の花のエピソードはそれを象徴的に物語る。

3、東国の恋歌

Ⅰ『金槐和歌集』の恋歌

一方、実朝と信生には、全く異なる詠歌傾向も見出せる。それは恋の歌に顕著なのである。まず、実朝の恋歌をみよう。

定家所伝本『金槐和歌集』恋部に特徴的なのは、141首の配列構成である。背景は山に始まり海に終わる。

［冒頭歌］初恋の心をよめる

371春霞龍田の山の桜花おぼつかなきを知る人のなさ

［末尾歌］恋の歌

511武庫の浦の入江の洲鳥朝な朝なつねに見まくのほしき君かも

冒頭歌から末尾歌に至る間に、空、野、水辺、田、森…と背景は移り、空間の移動と言葉の連鎖が相俟って様々な恋のプロセスが展開する構成である。[11]

そして、題詠歌が多いのが特徴である。「恋」「恋の歌」「～の恋」「～に寄する恋」「～をよめる」等の題による詠歌は、女性の立場で詠まれることも多い。典型的な例を挙げる。

待つ恋の心をよめる

451狭筵にひとりむなしく年も経ぬ夜の衣の裾あはずして

452狭筵に幾世の秋を忍び来ぬ今はた同じ宇治の橋姫

453来ぬ人をかならず待つとなけれども暁方になりやしぬらむ

「待つ女」に仮託する女歌である。

また、定家所伝本『金槐和歌集』は、実朝詠のみで構成される。恋歌も同様である。人に遣わしたと詞書にある数少ない歌に相手の返歌はない。例を挙げる。

遠き国へ罷れりし人、八月ばかりに帰り参るべきよしを申して、九月まで見えざりしかば、かの人のもとに遣はし侍し歌

425来むとしも頼めぬ上の空にだに秋風吹けば雁は来にけり

426いま来むと頼めし人は見えなくに秋風寒み雁は来にけり

専ら恋する者の内面、憧れや苦悩が伝統を踏まえて表現されるのが実朝の恋歌の特質である。その世界は後述する信生歌に比較すれば、虚構性が強く、憧憬の時空を紡ぎ出しているとも言えるのである。

Ⅱ『信生法師集』恋歌の特質

『信生法師集』歌集部のうち、春・夏・秋・冬・賀に相当する和歌は、圧倒的に題詠が多い。先に掲げた梅花のエピソードは春歌中、唯一の例外である。ところが恋部に至ると、題詠の割合が少なくなり、さらに雑部では、恰も紀行部の続きのように、詞書が長く散文が主体となる傾向を見せている。

恋部の特質は実朝の場合と対照的と言ってもよい。歌数は78首。うち題詠は28首（114～141）。題詠歌の割合が少ない。

142番歌以降の50首[12]には、恋の状況が詞書に説明され、また贈答歌も多く、女性の歌とするものも所収されている。恋の相手も一人ではないようである。機知に富んだやりとりは時に劇的ですらある。様々な事情を反映する状況は、体験的な恋であることを匂わせる。大胆ともいえる伸びやかさ、闊達さ、生き生きとした人間模様の展開に、実朝の忠臣であり、子どもたちの父であった塩谷朝業の、まったく別の顔を見る思いがする。

Ⅲ『信生法師集』と『新和歌集』

ほぼ同時代の私撰集『新和歌集』に載る信生歌を『信生法師集』に比較して特徴をみておきたい。

『新和歌集』に次の贈答歌がある。

あひ知れる女のもとへきるべきものなどつかはしたりけるに、さらずともて返したれば　　信生法師

604契りしを思ひ返すか小夜衣さてやうらみのつまとなるらむ

女返し

605せめてなほ飽かぬ名残に小夜衣夢に見ゆやと返すばかりぞ

この贈答は『信生法師集』の次の歌に関連があろう。

年来物申し侍る女の、「異人を見せむ」と申し侍りしを「さも」と申し侍りしかば、浅き心のほどを聞きて

146小夜衣隔てなくこそ契りしにいかで怨みのつまとなるらむ

和歌はまったく同じではなく『信生法師集』に女の返歌はないが、小夜衣に纏わる恋の怨みという点で共通する。着物を贈ったところ返してきた女と行き違う心理に恋の終わりを匂わせる『新和歌集』の伝統を踏まえた贈答に比べ、『信生法師集』の何と素朴で伸びやかであることか。「いい人を紹介

しようか」とからかったところ、「それでもいいわよ」と言われてがっかりする件、滑稽味もある。

また、『新和歌集』の

暮を頼めて来ざりける女のもとへ諌むる人ありと聞きて　信生法師

620天の原横切る雲や隔つらむそら頼めなる十六夜の月

は、『信生法師集』の次の贈答に通じる。

暮を頼めてむなしく侍りし女のもとへ諌むる人ありと聞きて

172山の端を横切る雲や隔つらむそら頼めなる十六夜の月

返事

173数ならぬ身を浮草の絶えせねば思ひぞ曇る十六夜の月

信生歌は第一句のみに異同があるが、歌意は基本的に変らない。夕暮時に約束したのに女性が来なかったのは、月を隔てる雲のように、どうも諌める人のせいらしい、と信生が詠みかければ、絶えせぬ物思いで心が塞ぐのです（あなたのせいよ）、と切り返す女性。『新和歌集』には女の返歌はなく、このやりとりの面白さは反映されない。

そして、この場合、男が女を待っているのである。

Ⅳ「待つ男」の登場

『信生法師集』恋歌の顕著な独自性は、「待つ男」の登場である。「待つ男」を「訪う女」という関係性が明確な例は次の通りである。

・未だ打ち解けず侍りし女、立ち出でて侍りし暇に詣で来寄りて帰り侍りしかば

148かりそめの契りだになき荻の葉をいかに頼めて結び置きけむ

・宵の程物なんど申して帰り侍る女のもとより

154唐衣心は袖に留め置きて身の憂きことを思ふばかりぞ

・待つにむなしく明けぬる朝、女のもとへ遣はし侍る

155知るらめや待つにて明くる春の夜もいま一入の思ひ添ふとは

・秋の頃、女の、逢ひて立ち還り侍りし朝に遣はし侍る

156暮待たで消えなむものか帰るさの名残の露に秋風ぞ吹く

女が来るばかりではない。不可解な忘れ物をする。

・女のうらなしを留めて帰り侍りしを、追ひて遣はすとて

145片枝挿す麻生の浦梨跡絶えば憂き身もいかにならむとすらむ

・逢ひながらうちも解け侍らぬ女の、帯を忘れて帰り侍りし、遣はすとて

158夜もすがら辛さを結ぶ下紐の誰に解けてか今朝は見ゆらむ

履物（うらなし）を置いて帰ってしまうとはどういうことなのか。打ち解けない女がなぜ帯を忘れて帰るのか。どのような手段で女性が通うのか。物を置いて去ることに何らかの意味があるのか。疑問は残るが、女性が来なければあり得ない忘れ物である。

さらに次の歌はいわゆる老いらくの恋。

老いの頃、「今宵」と申して見えず侍りし女のもとへ

157冴え冴えて契はしもぞ結びける待つに更けぬる袖の片敷き

「今夜行きます」と言って約束を違えたのは女性、待ち兼ねて嘆くのは老いた男性である。題詠歌にも老人の恋がある。

老後恋

133老いにける身にし思ひは増鏡辛さも影に映るなりけり

ここには「待つ男」の影はない。また、来ぬ人を待つ題詠歌に

寄雨恋

134今来むの契もいさや数ならぬ身を知る雨の夕暮の空

があるが、待つ身に仮託した女歌とみてよい。28首の題詠歌に「待つ男」は無縁である。

「待つ男」が頻繁に登場するのは、題詠歌ではない50首である。詞書に書かれずとも、女性が訪れることが自明の理として詠まれていることもあろう。信生以前は言うまでもなく同時代にもこのような歌集はあるまい。

V多様な恋

『新和歌集』には、例は少ないものの、当時の東国の男女のあり方を窺うことが出来る。

まず、「待つ男」の例は、先述した信生歌（620）以外には1首のみ。

久しく訪れざりける女のもとへ長月の末つ方につかはしける　平時兼

651吹き過ぐる風をたよりの荻の葉の秋果てぬとや訪れもなき

女の訪れの途絶え。女が男のもとへ通うのは東国では決して珍しくはない慣習であったことを窺わせる。

ただし、常に必ず女がやって来るわけでもない。『新和歌集』には信生の恋の相手の歌が2首見える。

・　信生法師のおこせたる文のはしに書きて女の返しける

638浜千鳥通ふかたがたあまたあればふみ違へたる跡かとぞみる

・　久しくとはざりける女のもとより、信生法師に申しつかはしける

657さてもさはかき絶えぬるかささがにのいかになるべき心細さぞ

ここにみる信生はなかなか艶福家のようで、あちらこちらに通っていく女がいて、怨みを買っている様子である。「待つ

男」は「通う男」でもある。因みに『信生法師集』にも、心変わりした女に「通う男」があると聞いて歌を遣る例がある。

物申し侍りし女のもとへ、通ふ人侍りけりと聞きて、次の年の春遣はし侍る

161春来ても猶滞る心かなうち出づる波の数にしあらねば

また、共住みの男女もいた。『新和歌集』には、長年共に暮らした二人の別れの贈答がみえる。

すみわたりける女、長月の末つ方にものへまかりて今は帰るまじきよし申したりけるに、移ろへる菊につけて遣りにける　浄意法師

653長月は明日を限りときくものを今日あきはつる人もありけり

女返し

654白菊のうつろふ色を見るにもあきはてけりと我ぞ知りぬる

さらに、家集『前長門守時朝入京田舎打聞集』[13]にある次の歌も看過できない。

思わづらふ

121行きやせむ来よとや言はむと思ふ間にやすくも月の更けにけるかな

この歌は前後の配列から判断して恋歌である。訪ねようかそれとも来るように言おうかと思い煩っているうちに月は傾いてしまった、の意である。信生の息、時朝の恋歌は、伝統的な題詠がほとんどで、父のような傾向を見出し得ないのだが、右の例には、行くのも来るのも、そこに男女の制限はないという東国性が仄見えよう。

鎌倉期の東国では、男女の往来がおおらかで都に比べるとはるかに自由であり、さまざまな恋のあり方が許容されていたと推察出来る。

Ⅵ色好みの変容

王朝的「色好み」という美的理念は「通う（行動する）男」と「待つ女」という図式の上で成り立つのである。[14]例外的に『源氏物語』の光源氏が夕顔を古びた別荘に伴い、『和泉式部日記』の女を帥宮が連れ出されることはあった。また、『建礼門院右京大夫集』では資盛が迎えの車を寄こしたこともあった。秘めたる恋では女の家ではない場所で逢瀬を持つこともあったが、基本的に女が男の居所を訪ねるということは、まずはあり得ぬことであった。和歌も自ずとこの基盤の上で詠まれた。

しかし、時が遷れば無論のこと、同時代でも遠隔地で文化体系が異なれば、「通う男」と「待つ女」の図式は成り立たなくなる。

実朝と信生の生きた時代、鎌倉と京の交通は、きわめて盛

んであり、人も文化も物品も頻繁に往来したことが『吾妻鏡』より知られる。一方、政治、経済の中心である都と周縁は大きく異なっていた。時代は下るが、後深草院二条（一二五七～？）の手になる『とはずがたり』には、鎌倉という土地柄に馴染めぬ記述がある。

（上略）化粧坂といふ山を越えて、鎌倉の方を見れば、東山にて京を見るには引き違へて、階などのやうに重々に、袋の中に物を入れたるやうに住まひたる。あな物わびしとやうやう見えて、心とどまりぬべき心地もせず。（234頁）[15]

地形ばかりではなく都とは異なる風俗習慣にも戸惑う。折しも将軍惟康親王が排斥され上洛する様子の惨さを目の当たりにし、

さても将軍と申すも、夷などがおのれと世を打ち取りてかくなりたるなどにてもおはしまさず。（240頁）

と書き留められ、都の優越性が覗かれる。二条は、すべての文化の規範である都から来たみやびな尼として行く先々で優遇されてもいる。旅人の目に映った鎌倉は、京とは隔たる辺境であった。

先に触れた婚姻に関わる制度、形態、慣習にも差異があったであろう。共住みにしても、まずは男性が通う招婿婚と同じとは考えにくい。注目されるのは、実朝の父母の結婚である。頼朝と結婚に至るいきさつが北条政子（一一五七～一二二五）の口を通して『吾妻鏡』文治二四月八日の条に記載されている。

御台所被二報申一云。君為二流人一坐二豆州一給之比。於レ吾雖レ有二芳契一。北条殿怖二時宜一。潜被二引籠一之。而猶和二順君一。迷二暗夜一。凌二深雨一。到二君之所一。

「流人として伊豆にいらした頃のあなたと私は契を結びましたが、父の北条時政は時勢を恐れ、私を家に閉じ込めました。それでもなおあなたを慕い、暗い夜に迷いながら、激しい雨を凌いであなたの元に辿り着いたのです」という結婚の背景には、時代の情勢と東国という地域性があろう。先の見えぬ状況にあって親の意志に反して燃える若い女性の情熱が感じとれる。まさしく女性が男性のもとに走った恋の成就が頼朝と政子の結婚であった。

一方、実朝は京から坊門信清の息女を妻に迎えている。三代将軍として父や兄をみてきた政治的な配慮や文化的志向もあったかと想像される。

鎌倉武家では一夫一婦制を守る方向性があり、京の貴族とは異なる、婚姻を重視した男女の男女間のモラルが生まれつつあった。北条重時（一一九八～一二六一）の『六波羅殿御家訓』ににについて、田端泰子[16]は次のように触れている。

婚姻前の武士の男性は、あからさまに女のもとに通うな、

そこに泊まったりするな、呼ぶなら若党の家に呼ぶべきで、自分の屋敷に呼んだりするな、と軽率な行動をとって、大事な婚姻を汚さないように諌めている（『六波羅殿御家訓』十三）。／また妻については、よくその心を見きわめて一人だけとすべきであるとも述べている（『極楽寺殿御消息』五十）。

これがどこまで浸透していたのかは、武家の階層によっても変わってくるであろう。家臣であった信生の郷里は、鎌倉よりさらに草深い鄙である。土俗的な風習も残っていたと想像される。

王朝和歌とは異質の恋歌には、以上のような背景があろう。

Ⅶ東国の恋歌

『金槐和歌集』同様、信生とほぼ同時代の私撰集、私家集の恋歌には題詠が圧倒的に多いのである。[17]『新和歌集』恋部は、ほとんどを題詠歌が占める。所収される信生法師の歌も5首中3首は題詠である。これは首肯出来る傾向である。異なる文化圏でその伝統を和歌表現に忠実に継承するならば、題詠という類型を踏襲せざるを得ないのではあるまいか。題詠の恋歌には「通う男」と「待つ女」の図式が潜在している。『信生法師集』恋歌においても題詠に関しては例外ではない。

その一方、「待つ男」と「訪う女」の関係が『新和歌集』『前長門守時朝入京田舎打聞集』の恋歌に仄見え、『信生法師集』で大胆に表出される。待つ辛さを託ち、約束を破られて落胆するのは、女だけではない。そのような状況の表現には、詞書が大きな役割を果たしているのである。

そこには東国の現状と実朝とは異なるひとりの臣下の生活環境が反映していよう。題詠の多い風潮にあって、『信生法師集』の恋歌は、詞書と和歌という伝統形式を踏まえつつ逸脱した例外と言い得よう。この意味で稀有の特質をもつ家集である。

4、むすび―実朝と信生

和歌を媒介にした君臣の和やかな交流は、実朝に対する敬慕の念を深め、家臣同士の絆も強めた。実朝歌と信生歌の表現の類似は、梅花のエピソードに象徴される精神の親和性と感性の共鳴を示唆する。

その一方、恋歌に至ると両者の相違が歴然とする。そこには資性のみならず、生まれ育った環境、主君と臣下という置かれた立場の差異もおおいに反映していよう。将軍として、常に京の朝廷と歌壇に目を向けていた実朝は、きわめて忠実に和歌の伝統を学んだ。『金槐和歌集』恋部は題詠歌を配列構成して、王朝物語的情趣を紡ぎ出そうとしている面もある。

東国の帝王の品格の規範は貴族文化にあったと思われる。一方、「待つ男」の頻繁に登場する『信生法師集』に顕著なのは、東国の土俗をしのばせる躍動感ある恋の世界である。

恋の詠歌傾向は対照的とも言える二人の歌人だが、伝統の継承という問題に着目するならば、辺境にあって中央で醸成された伝統様式を学ぶ独自の達成と限界を、実朝にも信生にも見ることが出来るのではあるまいか。

（教授　日本文学）

注

① 『信生法師集』の引用は、宮内省書陵部蔵『信生法師集』に拠り、私に表記する。参考：拙著『信生法師集新訳註』風間書房2002

② ・拙著『金槐和歌集の時空』（和泉書院2000）第一章「時空と表現」で述べた。
・実朝は没後、勅撰集に「鎌倉右大臣」として名を連ねる。『信生法師集』でも実朝を右大臣殿と称している。

③ 引用は『新編国歌大観第一巻』（角川書店）により、私に表記する。

④ ②の拙著、第二章第二節「『信生法師集』における実朝像」で論述した。

⑤ 本文中の『吾妻鏡』引用は、すべて国史大系『吾妻鏡』（吉川弘文館）に拠る。

⑥ 『新和歌集』の引用は、『新編国歌大観第六巻』（角川書店）に拠り、私に表記する。

⑦ 定家所伝本『金槐和歌集』の引用は、佐佐木信綱解説の復刻版に拠り、私に表記する。

⑧ 「雪の夕暮」については拙稿「実朝と後鳥羽院―定家所伝本『金槐和歌集』をめぐる試論―」（川村学園女子大学研究紀要　第23巻第1号2012・3）で触れた。

⑨ 「今日過ぎぬ命もしかとおどろかす入相の鐘の声ぞ悲しき（新古今・釈教1955・寂然）」のごとく、人生の悲哀を反映させる詠が多い。

⑩ 信生歌、下の句不明。

⑪ ②の拙著第一章第二節「憧憬の時空―恋歌の配列構成―」で論じた。

⑫ 142番歌以降の全歌を掲げる。

142 心ならず遠き程へ立ち離れ侍りし女の事を思ひ侍りて
思ひやる心の末ぞ知られける千里の雲の夕暮の空

143 秋と頼めて春別れし女のもとへ
秋待たで露の命は消えぬとも草の原訪ふ人もあらじを

144 女のもとより形見にもとて、歌を書き集めて賜うて侍りし返事
書きつくる人の心やいかならむ跡は変らぬ形見なりとも

145 女のうらなしを留めて帰り侍りしを、追ひて遣はすとて
片枝挿す麻生の浦梨跡絶えば憂き身もいかにならむとすらむ

146 年来物申し侍る女の、「異人を見せむ」と申し侍りしを「さも」と申し侍りしかば、浅き心のほどを聞きて
小夜衣隔てなくこそ契りしにいかで怨みのつまとなるらむ

147 女に遠く立ち離るること侍りしに、道より申しける
思ひやれ暮を待つだに堪へぬ身のやがて隔つる峰の白雲

未だ打ち解けず侍りし女、立ち出でて侍りし暇に詣で来寄

りて帰り侍りしかば

148かりそめの契りだになき荻の葉をいかに頼めて結び置きけむ
思ひ放たぬやうに返事は申しながら、さすが強く侍りし女のもとへ

149言の葉はまだ秋果てぬ色ながら露の契のなどや絶えなむ
忍びける女のもとより

150人目のみしげき軒端の忍草忍ぶものから露ぞこぼるる
返事

151もらすなよ時雨降るやの忍草忍びもあへず露こぼるとも
女のもとより、月明かき夜申しおこせて侍る

152物思ふ涙に濡るる袖の上にいかに契りて月宿るらむ
返し

153思ひやる心の月や宿るらむありし名残の露を訪ねて
宵の程物なんど申して帰り侍る女のもとより

154唐衣心は袖に留め置きて身の憂きことを思ふばかりぞ
待つにむなしく明けぬる朝、女のもとへ遣はし侍る

155知るらめや待つにて明くる春の夜もいま一入の思ひ添ふとは
秋の頃、女の、逢ひて立ち還り侍りし朝に遣はし侍る

156暮待たで消えなむものか帰るさの名残の露に秋風ぞ吹く
老いの頃、「今宵」と申して見えず侍りし女のもとへ

157冴え冴えて契はしもぞ結びける待つに更けぬる袖の片敷き
逢ひながらうちも解け侍らぬ女の、帯を忘れて帰り侍りし、遣はすとて

158夜もすがら辛さを結ぶ下紐の誰に解けてか今朝は見ゆらむ
七月後朝に女に別れ侍るとて

159たなばたの絶えぬ契はさもあらで別ればかりを何譬ふらむ
また物申し触れ侍るかたを嫉み申す女のもとへ、身に患ふ事侍りし頃、詠みて遣はし侍る

160露の身のかくて消えなば濡れ衣の乾かでやまむ名こそ惜しけれ
物申し侍りし女のもとへ、通ふ人侍りけりと聞きて、次の年の春遣はし侍る

161春来ても猶滞る心かなうち出づる波の数にしあらねば
物申し侍りし女の恨むる事侍りて、しばしかき絶えて、あらず侍りしかば、詠みて遣はし侍る

162忘れじの契は夢に成し果てて辛さばかりぞ現なりける
返事

163忘れじの契も夢になり行けば夢かとぞげに驚かれぬる
年の内に物申し初めたる女、春と契りながら、春も何となくむなしく過ぎ侍りしかば

164あらたまる春と頼めていかで猶辛さの去年に変らざるらむ
世を慎む女、宵の程、「物なんどよしなし」と申し侍りしかば

165現ともまだ醒めやらぬ逢ふ事のやがて夢にもならむものかは
女のもとより

166思ひ侘び憂き世の外を訪ねても見し世の夢のいつか醒むべき
返事

167後の世に醒めても我は忘れじな見果てぬ夢の残る面影
物申し侍りし女、仲絶えて、もとの男と春の頃返り逢ひにけりと聞きて

168色見えぬ人の心は花のみぞいつしか春はねに返りける
忍びて逢ひ侍る女のもとより、帰り侍りし朝

169花染めの返る習ひをいかにせむうつし心もなさばなき身を
春より通ひ侍りし女、水無月の末にかき絶え侍りしかば、おも□かとて遣はし侍る

170吾妹子が心に秋や立ちぬらむ情も今はみなつきの空
返事
171吾妹子が心にのみや秋も来む人の情もみなつきの空
暮を頼めてむなしく侍りし女のもとへ諌むる人ありと聞きて
172山の端を横切る雲や隔つらむそら頼めなる十六夜の月
返事
173数ならぬ身を浮草の絶えせねば思ひぞ曇る十六夜の月
女のもとより、稲の穂を文に包みて遣はして侍る、その穂につけて
174穂に出でて何厭ふらむ逢うふ事を稲葉の風も秋は著きを
人目を慎みて、心にも詠ませ□を嘆きて、世を憂きことに思ひなりにし女のもとへ、念仏の事を書きて遣はす草子の奥に
175思ひ出でよ山の端近き月見ても西に傾く類ありきと
暇もなくて、またも逢ひ侍らざりし女のもとへ
176かきくらす心の闇の晴れやらで来む世にさへや闇に迷はむ
陸奥国へ立ち離るる女のもとへ申しさくしくなりて
177いたづらに君も齢や武隈のまつとせし間に年ぞ経にける
物申し侍りし女、親はらからに諌められて、心ならず遠き所へ立ち離れ侍りしに、思ふ心やありけむ、さ見え侍る気色の見え侍りしかば
178めぐり逢はむしばし憂き世に影とめよ誰も思ひは有明の月
かの女、道より髪を切りて遣はすとて
179一筋に思ひ切れども黒髪の乱れて物ぞ悲しかりける
返事
180大方は思ひ切るとも黒髪の元結ひ置きし契違ふな
様変へて後遣はし侍りける
181よしさらば苦しき海に舟出して我をも渡せ須磨のあま人
返事
182あま人と身はなりぬれど舟出して渡すばかりは法も習はず
深く長き世までと頼めて侍る女、「この暮には必ず物申さむ」なんど申しながら、人目しげくて叶うふまじきよしを申しおこせて侍りければ
183めぐり逢はむ契もいさやかねてより曇ると見ゆる山の端の月
□なんど申して後、仲絶えて侍る女のもとより
184絶えぬかな岩間隠れの忘れ水浮き名ばかりを世には流して
返事
185思ひ出でぬ契ならばぞ忘れ水さて山の井の絶えも果つべき
七月七日、女のもとより
186さらぬだに別れを惜しむ織女に濡るる衣をまたや貸さまし
返事
187織女に濡るる衣を貸すなゆめ重ねむ夜半もたぐひもぞする
心にまかせて物なんど申すことのなきにつけても、世を厭はしきことに思ひなり侍りける女のもとより
188契あらば同じ蓮を願ひてむよしやこの世を思ひ絶えねよ
返事
189この世にて露も契も堪へてこそ頼みもあらめ蓮葉の上
物申し侍りし女、心ならず立ち離るる事侍りしに、いかなる人に心移らむと疑ひ、申し侍りし
190わが心もしも浅間にさもあらばくゆる煙とともに消えなむ
程経て後、この返事侍るに、「様変へてと申すなむ」と聞き侍りしかば
200めぐり逢はで憂き世背かば月影に違ひし雲の覆ふと思はむ

⑬ 引用は、『私家集大成第四巻』（明治書院）に拠り、私に表記する。

⑭ 拙著『〈色好み〉の系譜―女たちのゆくえ』世界思想社 1996

⑮ 『とはずがたり』の引用は、新潮日本古典集成（福田秀一校注）に拠る。

⑯ 田端泰子・細川涼一『女人、老人、子ども』日本の中世４　中央公論社 2002

⑰ 恋歌のみならず『新和歌集』『東撰和歌六帖』全体を見渡すと、題詠が圧倒的に多い。とりわけ『東撰和歌六帖』は題詠で整理されていると言ってもよい。